

「夢の舞台」に立ち

苫小牧市立和光中学校 岡元 優

【はじまり】

過去41回の中体連大会で、苫小牧市の女子チームが全国大会に出場したことは一度もありませんでした。現在、兵庫県で白血病という大病と闘っている、前苫小牧地区強化委員長の青翔中学校山岸先生をはじめ、たくさんの諸先輩方とお酒を酌み交わしながら、どうしたら強い苫小牧地区をつくることができるかなどを熱く語り、「いつかは苫小牧の女子が全国の舞台に…」と考えていました。そんな中、キャプテンの角田達が小6の時に、ミニバスの全道大会にすら出場することが出来なかったため、3学期から中学校の練習に時々参加しに来ることになりました。初めて見た時に、ディフェンスの脚力や中学生達に気後れすることなくボールを奪い取るなど、ボールへの執着心などに優れたものを感じました。

彼女たちが入学し各地区から優秀な1年生チームを集めて試合を行う「メモリアル大会」に出場することになりました。北白石中に負けはしたものの、個々のディフェンス力が全道で通用すると選手共々実感しました。しかし、たくさんの方々から「スピードがあり将来楽しみですね」と言われる反面、誰もが「でも、サイズがないよね」と必ずのように言われました。メモリアル大会初日に行われた、秀島先生の指導者クリニックで「毎年この大会に参加しているチームの中から、全国に出場しているチームが出ています。2年後全国大会へ出場するチームが出ることを願っています。」という言葉を受け、その夜のミーティングで選手達と「全国に出られたら良いね」などと話していたことは、今もはっきりと覚えています。

昨年度千歳市で行われた全道大会では、2年生主体のチームで臨みましたが1回戦で美幌北中学校に敗退しました。やはり下級生主体ということもあり、また、彼女たちにとって初めての全道大会という舞台で十分な力を発揮させることが出来ず、ベンチや応援席にいてコートに立つことができなかった3年生に大変申し訳ない気持ちで一杯でした。

全道大会決勝の翌日から、新チームがスタートしました。最初のミーティングで、チームの目標が「全国大会出場」に決まりました。今まで経験したことのない舞台に挑戦するために、まず千歳の全道大会でも大きな課題だと感じていた「体力不足」を克服するため、練習前や練習後に常に走り込みやトレーニングを行いました。もう一つの課題が、チームの中でも一番大きい選手が159cmという、高さの問題です。どのように戦うか考えていたところ、2学期から保護者の転勤の関係で釧路から島谷が転校してきました。168cmとそれほど大きくは感じられないかもしれませんが、フラッシュポストのタイミングが非常に上手く、また、3Pなども打てる選手で小柄な和光中学校にとって、とても大きな戦力になってくれると強く思いました。

新人戦南北北海道大会や決戦大会後は、上家菜々子、島谷莉央の2名が北海道選抜に、2年生4名と1年生4名は苫小牧選抜での経験を積んでいきました。また、地区協会の強化委員長である駒澤大学附属苫小牧高校の田島先生の勧めもあり、道外遠征を行ったり、北海道カップなどで道外のチームとの対戦も経験し、たくさんのことを学ぶことができました。

た。バスケットボール以外のことでも、気の利いた自然な挨拶や素早い行動など、中学生としてとても大切な部分も多く学ぶことができ、生徒達にとって大きな刺激を受けることができたと思います。

【市内大会・胆振大会】

6月からいよいよ3年生最後の苫小牧市内の中体連大会が始まりました。決戦大会などの結果から、周りの方々から頻繁に「全国へ…」という言葉が聞かされる機会が多くなりました。当然、選手にも同じような状況があったため、プレッシャーになっていた生徒もいると感じ、「とにかく、自分たちがやってきたことを1試合、1試合表現して行こう！結果はその後に付いてくる。」と確認し大会に臨みました。市内大会・胆振大会と順当に勝ち上がり全道大会への切符を勝ち取ることができました。全道大会は、幸運にも31年ぶりに苫小牧開催でした。そのため、普段の大会では苫小牧総合体育館のメインコートで試合をすることなどないのですが、全道大会の運営の練習も兼ねて地区の春季大会と胆振大会の決勝で、メインコートを設営しました。アウトサイドからのシュート力が売り物の我々のチームにとって、メインコートでの試合を2度も経験できたことはやはり地元開催の利であったと思います。

胆振大会から全道大会までは、地元の高校生に練習試合をして頂いたり、ここ数年全道大会でも活躍している室蘭の海星学院に胸を借りながら調整しました。全道大会までは、主にゾーンに対してのオフェンスと島谷にボールが入った後の合わせなどを中心に練習に取り組み本番に臨みました。

【全道大会】

初戦は網走第二中学校でした。実は和光中学校は、全道大会で偶然にも3年連続初戦がオホーツク地区との対戦でした。釧路全道では、男子が北見北光中に2点差で敗れ、千歳全道では、女子が美幌北中に大敗し、今年で3度目です。1月の決戦大会で一度対戦していたため、事前にある程度要注意の選手への守り方や特徴を確認しながら試合に入りました。やり慣れている会場とは言え、全道大会の初戦で硬さが目立ち、1Qはフィールドゴール成功率が9%という内容で始まりました。しかし、持ち前のディフェンス力で相手の得点を3Qまでに16点に抑え、三度目の正直を果たすことが出来ました。

3回戦は、芦別中学校でした。ここが、一つの山場と考えていました。能力のある素晴らしいセンターがいるチームで、小柄な和光中にとっては苦手なタイプのチームです。4Qで、今まで5ファールで退場した記憶が一度もないキャプテンの角田が退場してしまいました。チームの精神的な柱である彼女を失い、芦別の猛攻を受けましたが、最後は上家が冷静にコントロールし3点差で勝利し、最終日に駒を進めることができました。試合後のミーティングで、以前、海星学院の中島先生から「地方のチームは、札幌2位のチームにコロッと負けることが多いので気をつけて。」と選手へのアドバイスを頂いていたことを思い出し、もう一度スカウティングしたことを確認し合い、選手の気持ちを引き締めました。

そして準決勝の札幌向陵戦。途中ゾンプレスが効いたことと上家、角田の5連続3Pなどで勝利することができました。決勝に進んだ段階でチームの目標である全国出場は達成しましたが、「悔し涙」を流すチームはたくさんあるが「うれし涙」を流せるチームはたった1チームのみなので、「うれし涙」を流して終わろうと試合に臨みました。試合開

始早々相手の7連続得点で苦しい展開となり、また、角田が負傷退場という展開のなか、上家、島谷、白幡の活躍もあり前半を2点ビハインドで折り返しました。しかし、後半に入り北海道を代表するセンター栗林選手や1年生センターの藤原選手の高さなどに徐々に苦しめられ島谷が5ファールで退場してしまい、試合も9点差で負けてしまいました。コートに立っている選手は最後まで諦めることなく、よく戦ってくれました。結果「うれし涙」を流させてあげられなかったことは、私の力不足以外のなにものでもなく、3年生に申し訳ない気持ちでした。

【全国大会】

全国大会までは、オフボールマンの動きや、シュート練習にほとんどの時間を割きました。また、地元の高校生や、社会人チームなどとゲームをして調整しました。また、全道大会までトレーナーを帯同させていませんでしたが、「日本で一番暑い県」埼玉県の強烈な暑さで体調を崩す生徒や、今回の全道大会決勝のように選手が負傷した場合のことを考え、トレーナーに同行してもらうことになりました。苫小牧のチームで、トレーナーを入れているチームはなく、しかも苫小牧にトレーナーがいるとの情報も聞いたこともありませんでした。そのため、室蘭星蘭中学校の中村先生のご協力で星蘭中学校のトレーナーである、佐藤美歩さんに埼玉県まで同行して頂き、試合に集中できる体制ができました。

予選で対戦する宮城県代表の八乙女中学校と山口県代表の日新中学校の情報については、ある程度集めることが出来ました。二度の公開練習では、実際に試合を行うさいたま市の記念総合体育館サブアリーナでの練習ができました。心配していた暑さも、サブアリーナについては空調の効果もあり、それほど苦にならなかったことが救いでした。

予選リーグ1試合目は、宮城県代表八乙女中学校でした。175cmのセンターと、日新中学校戦で3Pを7本を含め、37得点していた167cmのキャプテンの対応を確認しゲームに入りました。相手の2-1-2ゾーンに対して、上手くパスで崩す場面が多かったものの、和光中の生命線であるシュートがことごとく決まらず苦しい展開となりました。逆に確認した2人については、よく角田と島谷が止めていましたが、それ以外の選手にやられてしまい7点差で前半を折り返すことになりました。2Qの終盤から、ゾーンプレスで追い上げをはかりましたが、ディフェンスは効いているものの、オフェンスでいつもではあり得ないようなパスミスやシュートミスなどを重ねてしまい最後まで流れを引き寄せることが出来ずに39-50で初戦を落としてしまいました。初出場のチームと昨年も全中を経験しているチームとの差が、多少出てしまったようにも感じました。

気持ちを切り替え2試合目の山口県代表日新中学校との対戦でしたが、開始早々から畳み掛けられてしまいました。タイムアウトを取りディフェンスを変えましたが、指示が甘かったこともあり相手の勢いと止めることが出来ず、前半で試合を決められる形となってしまいました。結局49-58で予選リーグ敗退となり3年生の夏が終わりました。最後の得点が、上家の3Pだったことが和光中学校らしい終わり方だったと思っています。

全国での2試合を振り返り、北海道代表で唯一予選敗退という結果で終わってしまいましたが、初めての全中という夢の舞台上、選手は最大限頑張ってくれました。ただ、指導者として私自身の詰めが甘く、まだまだ勉強不足であると反省の言葉しか出ない大会で、選手に申し訳ない思いばかりです。しかし、このチームのやってきたことは、苫小牧地区のバスケットボールを愛する選手・指導者に、「地方からでも全国に行ける！」という思

いを植え付けたと確信しています。私自身も、次こそ全国で勝てるチームを創り、是非またあの舞台に立ちたいと強く思うようになりました。

最後になりますが、道協会、道ジュニア連盟、地区協会、地区ジュニア連盟の皆様、及び道内の指導者仲間の皆様（気安く仲間と言ってすみません）や関係者の皆様のご協力とご支援本当にありがとうございました。そして、なにより保護者の皆様には、3年間未熟な指導者の私に文句も言わず、最大限の協力をして頂いたこと、心から感謝申し上げます。たくさんの方々に感謝しつつ、埼玉全中の報告といたします。